

オカトラノオ

—— イエスの横顔

岡 虎夫

イエスは「父よ、もしできることならば、この杯がわたしの前を通り過ぎるようにしてください。しかし、わたしの思いどおりではなく、あなたのおぼしめしどおりにしてください」とお祈りになった。それから、弟子たちのところに来てごらんになると、彼らは眠っていた。

— マタイによる福音書 第二十六章 第三九節 —

序 五回り

アナタのそばに花が咲いていますか。花屋の花ではありません。花瓶の花ではない、もつと石ころのような花です。

オカトラノオという雑草をごぞんじですか。花屋に置かれない、見捨てられた花です。岡虎尾という和名もっています。山野の草原に咲いて、『私の叫びを聞け』という不思議な花言葉をもった花です。

オカトラノオ、オカトラノオとくちずさんでみてください。耳をすますと、その白い小さなたくさんの花びらが、〈ワタシのイノチの叫びを聞いてください〉と、ささやくのが響いてきます。

オカトラノオ、と叫びます。聞こえませんか。静かにいつせいに叫ぶのです。山野の日当たりのよい草原で、叫び続けて群生し、叫び疲れて秋になると赤く染まってしまいます。

この花は不器用で愚直だから、枝分かれもせずに茎一本で直立し、根幹はいつも赤みを帯びています。

しかし、その根は深いのです。

風の強い日には特に、ビルの向こうから木霊してくるオカトラノオの叫びに耳を澄ませてみてください。

オカトラノオ

アナタの、素顔はどんなですか。

アナタは、イノチの根っこをもっていますか。

古い記憶のことです。……ワタシはクルッテしまいました。ずうっと幼いときから。ワタシはクルッテしまった。それ以来、愛情が手にとって表現できない。……特に、風の強い日は。

オカトラノオ

アナタは、人の素顔をどんなだと思いますか。

誰も気づかない、その人の心の顔です。

それがアナタのほんとうの顔ですか。——鏡を覗けば、分かることです。アナタが今本気でしゃべったその言葉が、たちまち崩れてしまうその顔のことです。

オカトラノオ

アナタは、今まで見た夢をいくつ覚えていますか。見る夢ごとに、素顔に出合いませんか。けっして人に語れないことです。……親しい、憎い相手を一人また一人と銃で撃ち殺してゆくときのなんともスカッとしたあの快感。

オカトラノオ

それではアナタは、その若く美しい顔の日に、どれくらい裏切られましたか。ワタシは、毎日でした。——それでも、懸命に守って生きていたのです。日一日と、我と我身を確かめました。ところが、ワタシは裏切られた。セメラレてセメラレて、ワタシはいつも追い込まれました。

暑苦しくよどんだ真夏の日の午後、薄暗いアパートの小さな角部屋で、こんな夢を見ませんでしたか。

……鬼が踊るのです。何匹もの鬼がドアの所に立って、腰の砕けたクラゲのような格好で、ケタケタケタケタ笑いながら踊りまわる。ワタシは必死になって木刀を振りかざし、何度も切って殺そうとしました。ところが木刀を振り下ろすや鬼はさっと消えてしまい、諦めるとまたケタケタケタケタ笑いながら現れて踊るのです。……ドアの外を、犬が通って行くのが見えます。欲情をブラブラぶらさげた犬が、かなしげな目付きで歩いて行く。見ていると、行き交うメスを次々に犯してゆく。一匹ずつ順繰りに、これでもかこれでもかと、ぶらさげた欲情が憎くてたまらずに、何度も何度も……

湿った小部屋で、タラタラタラタラと汗を垂らしながらワタシはこれらの夢を見続けました。

オカトラノオ

イノチがギューギューと音を立てて縮んでゆきます。
何がクルッタのか、ワカラナイコトばかりです。

吐くときの、苦しいけれどもその後のスッキリした気分なら、アナタもごぞんじでしょう。
ワタシはそれが欲しくて飲み続けました。

オカートラーノオー

ワタシハ コノ世デ ハハニ会エルト信ジテイタノデス。 クルッタハハニ イツカ目ノ
前デ会エルト 思ッテイタノデス……。

ワタシハ ハハノ先ニ行ツタ雲ノ上ノ国ニ行クタメニ モガイテイタノデス。クルッタヤ
サシイ ワタシノ大好キダツタハハニ 会イニ行クタメニ ワタシハ 自分ヲ守ラナケレ
バナラナイト 信ジ込ンデイタノデス。

……アナタの根っこはどこにつながりますか。一つ一つ手繰り寄せれば気の遠く
なるほど彼方で、しかし身近な記憶の話です。

アナタはどうやってその不可解な道筋を辿ってきたのですか。

ワタシは、雲の上の御殿を見たことがあります。小学二年生でした。梅雨時の遅い夕暮れ、
ハハに手を引かれていました。雨の落ちるたんぼ道を母の実家へ急いでいました。ハハが突
然立ち止まり、ニッコリ笑いました。そして、空を指さしました。雲の上に鋭い光が走りま
す。その明かりの間隙に、ワタシはハハと一緒にくつきりと見える美しい御殿を目にしまし
た。「あっ。」と言ったまま、ワタシは興奮してハハにしがみつきました。ハハはいつまでも
ほほ笑んでいました。……あのとき、ハハはクルイでした。

梅雨の日の午後、あかるい陽の射す縁側で、ワタシは学校がひけるといつものように寝そ
べって猫を撫でています。ワタシはそうやって時間を過ごすのが好きでした。ブーツとして
るのが楽しい少年でした。その日も、遊び疲れ泣きつかれてポカポカする板の間で猫を相手
に寝そべっていました。ワタシはそういう時いつも彼に話しかけ、彼がものをしゃべりそう
でしゃべらないのを悲しく思い、しまいにはいつも本気で叱りつけました。

「なすてえ、しゃべんねえのよおっ。」

猫はそういう時、同じように悲しい目をするものです。

そうしているワタシの耳に、納屋の方からいつものようにチチとハハのやりとりの様子が
ひびいてきました。チチが怒鳴っています。ハハが何か言い返しています。

チチとハハは喧嘩以外しませんでした。朝も昼も晩も、家の内でも外でも運動会をしています。追いかけたり、ものを投げたり叩いたり。そういうときワタシはハハの後を必死に付いて回りました。だから、ハハと一緒にいっしょによく頭を叩かれました。

「この薬っちは 風っこ強^え日ぬう 蒔^えでわがね^えぞう。」

ハハの言葉は聞こえません。チチの声だけが、物音ひとつしな夕暮れの景色の中でワタシの寂しい空洞に木霊していたのを覚えています。まだ十歳に満たないワタシは猫の腹を撫でながら、チチのいらだつ微笑をハハが浮かべているのが頭をかすめていました。

オカトヲノオ

アナタのところに、風が吹きますか。ワタシのところに吹く風です。竜巻のような強い風ですが、荒々しくはなく、包むように、しかもさあつと通り過ぎてゆく風です。それがやって来ると、いつも窓に合図をして行きます。ワタシのその風はヤマセと呼びます。その名を口にすると、ワタシの心臓はいつも高鳴ります。

風がトントンと窓をたたく日には、耳をかして下さい。ヤマセかもしれません。

ワタシの記憶の中で、この風に乗ったハハが白い衣を着て、白い顔をして、ワタシの前から舞い去って行きます。

東北の胆沢扇状地のワタシの村にはヤマセがやって来ました。普段はどこかに隠れているのでしょうか。山背風は、天候不順な季節に、突然吹き降りて来るのです。ワタシの村は、北上山地と奥羽山脈に挟まれた平地にあります。梅雨時は、俄か雨や霧も多く、ヤマセの恰好の通り道です。冷涼なヤマセは、戯れに山の斜面を急直下し、吹き抜けて行ってしまいうのです。

「オカちゃん どごさ行った？ 知らねえがあ？」

チチの声が上ずっていました。時計は九時を回り、チチの不安がワタシにうつりました。

「いい。わらすはもう寝ろ。」

しかし、祖母に抱かれても、窓の外が気になるばかりです。家中の窓ガラスがガタガタと騒いでいるのです。ワタシは訳の分からぬ空洞感に襲われて、祖母の布団の中でじっと息を殺していました。……消えたハハが戻らない。そのうち疲れて眠りだしました。

……夢の中で大きな声を聞きました。チチの叫ぶ声です。ワタシはおびえました。家の者たちが集まっているようです。ワタシも走り寄りました。

ずぶ濡れになったハハが倒れています。身体中泥だらけで、苦痛に歪んだ顔からはひっきり

りなしに唾と涙が出ています。

ワタシはおびえました。見たこともない醜い顔のハハに近寄るのを恐ろしく思ったのです。……ハハは、病院に運ばれてしばらくしてから、逝きました。

ベッドの上で唾と涙を吐き続けるハハの苦相。その後のほほ笑みを浮かべたいいつもの安らかな顔。

……明るい日差し縁側の縁側。愛猫と過ごす退屈で怠惰な時間。チチの声―。

窓をたたきにやって来るヤマセ。風に卷かれるハハ。

ヤマセがハハを運び、連れ去り、叫ぶ声。

オカア ドゴサア イッタノヨオ。オカア オカチャン ナシテ イッタノヨオ。

ハハ ハ ヒトリデ サキニユキマシタ。

日を重ね、年を重ねて、ヤマセがワタシに住みつきました。ハハと一緒に見た御殿の国へ、ワタシも連れて行ってくれるはずのヤマセ風。ワタシは、愛着しました。忘れかけると、頬に風があたり、忘れかけると、窓をトントンたたいて知らせに来るのです。だからワタシは、ヤマセの運ぶ雲上の国と一緒に生きて来ました。

ところが、雲上の国は思いの外遠かったのです。ワタシは苦汁をできるだけ飲もうとしました。飲むたびに、血の汗が足りないと感じ返されました。

『オカチャンハ ココサアイダゾウ。ナヌシテルツテヤア、早グコツチャ来オウ。…』

ワタシの苦悩は、生きるほどにハハの国がワタシから離れて行くことでした。

……消えてなくなりたいと願うとき、そばにはいつも誰もいませんでした。

オカトラノオ

ハハの苦相と死相と、微笑と断絶。風の音と、雲上の御殿と。

愛着と望みと願いと、襲われ続ける強迫と恐怖と、欲情と―。

風が吹き抜けると、ワタシの小さな村の雑草が一斉に震えだします。

オカトラノオ

もてあましてやり場のない狂気に、どうやって愛情など、手にとって語れるのですか。

オカトラノオ

ワタシハ スコシバカリ ツカレマシタ……。

……オカトラノオという雑草をごぞんじですか。へワタシの叫び声を聞け〜というかわった花言葉をもつ花です。小さくとも叫ぶ声をもっている、山間の風に吹かれて叫びながら生きていく、生きる限り叫び続ける花です。

オカトラノオは、ワタシにとりついた花です。